

「僕はずっとワインを愛してきた」

緻密な分析力と天性の感性を併せ持ち、ブルゴーニュの自然派ワインの寵児として注目を浴びるフレデリック・コサル。彼のひたむきなまでのワインへの思いが生きたワイン (Vin Vivant) を造る。

子供の頃の夢を叶える人はいったいどのくらいいるのだろうか？ フレデリック・コサルがワイン造りを夢に描いたのは、わずか8歳の時だったという。

「僕はおじいちゃん子だった。祖父が少しだけブドウ園を持っていてね。自家消費用のワインを造っていたんだ。それが僕のワイン造りのルーツ」とフレデリックは振り返る。じつは彼の父は酪農関係の仕事をしており、いずれは彼が家業の酪農を継ぐことを強く望んでいた。祖父はそんなフレデリックを父に内緒でワインカーブに連れて行ってくれた。

「あのワインカーブは秘密の思い出の場所だった。家には家庭菜園もあって、ブドウや野菜が生長するのを見て、ぼくは植物の命にも強く惹かれていた。それでいつかは、ブドウを育ててワインを造りたいって思ったのさ」と続ける。

ワインへの思いは学校を卒業する頃も変わらなかったが、ワインの仕事をすることを父は許さず、酪農関係の仕事に就いた。22歳になった時、ようやく父から「もう好きにしろ」と言われ、思い続けたワインの世界に飛び込んだ。その後も彼は夢の実現への努力を怠らなかつた。生産

者からワインを買い付け、ネゴシアンに

販売するクルティエの仕事を開始。この仕事をしながらも畑を探し続け、一方で毎日100種類以上のワインテイスティングを繰り返して、収穫時には毎年どこかのドメーヌでワイン造りの手伝いもした。

「テクニクに走る大手生産者の造り、あるいはそれと対極にある小さな生産者の造り、いろんな造りを経験した」

32歳の時、彼にとつて約束の地となったサン・ロマンの畑と出会い、これを機に彼はドメーヌ・ド・シャソルネイを設立。ワイン造りを夢見て24年、クルティエになって10年の時が流れていた。

「10年間の間に偉大なブルゴーニュワインも飲んだけど、どうもピンと来なかつた。けれど当時のブルゴーニュワインをすべて飲み尽くし、インスピレーションを受けたのは確か。自分が造りたいワインが何か、自分ではつきりとイメージすることができたよ」とフレデリック。そう、ドメーヌのスタート時に、彼には自分のやるべきことが見えていたのだ。

「たとえワインや畑が無名でも、心を揺さぶるワインがあることがわかってきた。僕はずっとワインを愛してきた。そして、僕が造りたいのはそんなヴァン・ヴィヴァン、生きているワイン、なんだ」



鹿取みゆき | 文 合田昌弘 | 写真
Text by Miyuki Katō / photograph by Masahiro Goda